

---

# 病みつきシュテル

黽b

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

病みつきシユテル

### 【Zコード】

Z0784BA

### 【作者名】

勲b

### 【あらすじ】

病みつきシリーズ第13弾！！

彼が帰宅すると、彼の家にある窓ガラスが割れていって

その家には、彼女が居座つていて

シユテル×オリ主です

(前書き)

「」の小説には

恋愛	40%
砂糖	40%
ヤングテレ	20%

が、含まれています

六課での仕事が終わり、家に帰宅する。

「……えつ？えつ！？」

久々に帰ってきたと思ったら、窓ガラスが割れていた。

空き巣か！？

管理団員の家に空き巣ですか！？

慌てて玄関を開け、家に入ると

「おかえりなさい」

淡々と、しかし何処か甘い声が聞こえた。

「ご飯にしますか？お風呂にしますか？私にしますか？」

やうやくと、シユテルは台所から出てきました。

……えつ？

「何でシユテルが居るの？」

「あなたが帰つて来ると聞いたからです」

「いや、鍵は？」

「合鍵を貰い忘れてたため、窓ガラスから入りました」

空き巣だよ！？

それは犯罪だよ！！

シユテルは俺に手を差し出す。

「合鍵をください」

「あげないよー？」

いきなり言いだすシユテルに応えると彼女は首を傾げる。

「何故ですか？」

私の言つことを聞けないんでしょうか。

恋人同士である私があなたの自宅の合鍵を貰つても何一つ可笑しなことはないじやないです。

むしろ、何故合鍵を渡してないんですか？

合鍵を貰わないと同棲出来ないじやないです

しなくていいよー？

そう言つたらどうなるかわからないな。

「合鍵を渡すにも余つてないんだ。ごめんね」

俺が言つとシユテルは一瞬だけ俯くと直ぐに目線を俺に戻す。

「でしたら、あなたが持つていてる鍵を私にください。

私は何時もこの家に居るので大丈夫です。

あなたが何時何時帰つても私はこの家にいるから、あなたは鍵を持たなくても大丈夫です「

いや、大丈夫じゃ

シユテルは戸惑う俺から鍵を奪う。

「ですが、買い物に行つてる時がありますから、帰つてくるときは連絡してくださいね、あなた」

「……誰があなただ

俺は溜め息を吐くと玄関の戸棚からスペアの鍵を取り出す。

「これ渡すから、こんなことしないでくれ

まあ、シユテルになら渡してもいいだろ。

「ありがとうございます」

シユテルから鍵を返してもちらにスペアの鍵を渡す。

「悪戯に使うなよ

「使いませんよ。

あなたの信頼を裏切るような真似はしません

信頼……

まあ、信頼してゐよ。

「それでは」と話を戻すシユテル。

「『』飯にしますか？お風呂にしますか？それとも

妖艶な笑みを浮かべ、人差し指を口元に持つていき、淡々と何処か甘い感じがする声で言つ。

「私にしますか」

……何処でそんなの憶えたんだよ

「『』飯がいいな、シユテルの作った料理をたまには食べたいし」

「はい、わかりました」

嬉しそうな笑みを浮かべて応えるシユテル。

「うつ所は素直に可愛いと思つんだけどな

行き過ぎた行動さえしなければ、最高なのにな

シユテルは料理が上手い。

何処で教えてもらつたのかは知らないけど、様々な料理を作れるし、どれも美味しい。

「どうぞ、召し上がつてください」

そう言つて並べられたのはオムライスだ。

「十一寧にケチャップでハートマークが書かれている。

「それでは、いただきましょつか」

「ちよつと待て

俺は何事もなく食べ始めようとするシユテルを止める。

「どうかしましたか？

もしかして、オムライスは嫌いでしたか？」

いや、そうじゃなくて……

「近すぎない……かな？」

シユテルは俺の隣に座っている。

それも、肩と肩が触れ合つていてぐらぐらの近さだ。

「問題ありますか？」

「いや、問題つーか……

「あーん」

「そんなことより、冷めないうちに食べましょ！」

そう言つて食べ始めるシユテルに続いて俺も食べ始める。

俺がスプーンで一口分すくうと、シユテルはスプーンを俺に差し出す。

「あーん」

……え？

「口を開けてくれないと食べさせれませんよ」

シユテルは不満そうに言ひ。

いやいやいやいや！！

「自分で食べられるからね！」

「ですが、恋人として彼氏に食べさせてあけたいじゃないですか」

恋人じゃないからね！？

シユテルは俺の顔を見ると納得した表情を浮かべる。

「あなたの言いたいことがわかりました」

そう言つと俺に差し出していたスプーンを引っ込め、食べ始める

シユテル。

……簡単に引き下がった？

まあ、いつか。

俺も冷めないうちに食べようかな。

「あなた」

「あなたって言つ

」

俺がシユテルの方を見ると同時に、彼女は俺にキスをした。

えつ

そのままシユテルは俺を押し倒すと口に何かを入れられる。いわゆる、口移しという行為だ。

つか、何で口移しなんて……！？

「ん、美味しいですか？」

俺から離れるとシユテルは無表情に聞いてくる。

「何で……こんなけど」

「あなたがあーんを拒んだからですよ。ですから、口移しをしました」

無表情に頬を赤らめながら言つ。

「やはり気持ちを伝え合うより行動で示した方が幸せな気持ちになりますね。

あなたとキスをしたら、私が愛されてるんだと再確認しました。私もあなたを愛しますよ」

淡々としかし、何処か甘い声でシュテルは言った。

……シュテル？

「あなたも私を愛してますよね。

私のことを愛してくれていますよね。

あなたが機動六課に入隊してからは私と会う時間も少なくなりましたね。

そんなにも彼女達が大切ですか？

それとも、私と居たくないだけですか？」

居たくないなんて思つたことはない。

「私よりも彼女達を優先するのは何故でしょうか」

シュテルはスプーンを手に取るとオムライスを一口分すくい、口に入れる。

そして、また俺にキスをして口移しをする。

「……もつと

もつと私にあなたの愛を感じさせてください。

あなたが私を愛してくれていると実感させてください」

また、オムライスをすぐつシュテル。

「シュテル」

なあ、シュテル

「何でしょうか」

何でお前は

「あーん」

俺が口を開けるとシュテルは首をかしげながら、オムライスを俺に食べさせる。

そして

「ツー!?」

シュテルに顔を近づかせ俺は彼女にキスをする。

「ん……ん!/?」

そのまま口に含んでいたオムライスを彼女に口移しする。

全て移したら、俺は顔を離す。

「なあ、シュテル」

顔を真っ赤にしながら、俺を見るシュテル。

「なんでそんなに悲しそうな顔をしてるんだ」

常に無表情な彼女  
でも、なんとなく、だけど

彼女が悲しそうな顔をしてた気がした。  
いや、してたんだ

「……当たり前じゃないですか」

シユテルは俯きながら言つ。

「あなたが私から離れていくのを嬉しく思えません

彼女は立ち上がる。

「ですから、決めたんです」

……決めた？

「あなたを六課から　　いえ、管理局から救つと」

真っ赤な顔をして、無表情で淡々としながら、何処か甘い声で

「私が

私だけがあなたを救える。

あなたの傍にいられる。

あなたの隣にいられる。

あなたの優しさに触れることができる。

私とあなた以外は邪魔です。

ですから、あなたを私以外の人から救います。  
だって私は

「

シユテルはデバイスを開発する。

何を

「私はあなたを愛しますから」

シユテルは言う。

デバイスである杖を此方に向けながら

最終通告のように

冷たい声で

次の瞬間、俺は意識を手放した

後日談というか、その後の生活

俺は六課を

……いや、管理局を辞めた

理由は簡単

“動けないから”

あの夜の日以来、俺はベッドの上で寝たきりの生活を過ごしている。

はじめは病院だったが、直ぐに彼女が俺を引き取った。

病院から退院した日以来、俺は彼女以外の他人を目にしてない。

俺の世話は彼女がしてくれている。

まるで当然のように

それが自分の義務のように

家のドアが開いた音がした。

あの日渡したスペアキーを使って開けたのだ。う。

鼻歌が聞こえる。

淡々としながらも何処か甘い声で

助けて

もう叫ぶのはもう止めた。

無意味だから

俺の世界は彼女と俺だけ

俺の声を聞くのも彼女だけ

無意味なんだ

だから声に出すのはもう止めた

助けて

誰でもいいから

扉が開く

もう彼女しか利用しない扉を彼女が開ける。

助けて

(後書き)

こんにちはー 効bでーす

新年早々に何やつてんだろう WWW

前々からリクエストされていていたシユテルのヤン△……（ゲフンゲ  
フン

シユテルがヒロインの短編です

ヤンゴンでレザーバイクは見たか？

じ、次回から本気だす

それでは歸れん

あたましおぬでじりやこせやーーー

今年もよろしくお願いしますーー！

今年こそまたおもなヤンデレを書きたいwww

P.S 新連載（番外編）として

病みつき語

を投稿しました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0784ba/>

---

病みつきシュテル

2012年1月1日21時46分発行